

種子島開発総合センター鉄砲館で戦後80年特別企画展「つながる記憶、未来へ」が9月28日まで開催中です。今年、戦争に関する証言や資料の提供を市民に呼びかけ、寄せられた16人からの情報を中心に展示しています。

同展は、日中戦争以降の種子島出身の兵士に関する資料と、戦時中の種子島の暮らしに関する証言を中心に構成。戦地から家族へ近況を知らせる手紙では従軍先の地名が、ある時期から伏せ字に変わり、戦況の深刻化に伴う検閲がうかがえます。沖縄戦の日本軍敗退後は種子島でも空襲が激しくなり、郵便局長による「空襲日誌」には職場での緊張感があふれています。

7月末からの会期中、8月2日には市民会館ホールで特別講演があり、知覧特攻平和会館（南九州市）学芸員の羽場恵理子さんが西之表出身の陸軍特別攻撃隊員、上成義徳曹長の遺書などを紹介しました。知覧では1941（昭和16）年、大刀洗陸軍飛行学校（福岡県）の分教所が開校した後、45年に特攻基地となりました。同館は、沖縄戦の特攻作戦で戦死した隊員1036人の写真や遺品を収蔵、展示しています。

上西出身の上成少尉（戦死後に昇進）は1937年に入営し45年3月、福島県で編成された第八十振武隊に配属。4月22日に出撃して戦死しました。25歳。4月4日付で両親に宛てた遺書は「郷土南西諸島に散る 又望ム所ナリ 郷土又戦場ト化ス 勝ツヲ信ジ健斗ヲ祈ル」と悲壮な思いを伝えます。講演当日の市民会館には種子島でも島民の「集団自決」寸前だったとする証言記録も紹介していました。

初盆の家も少なくなかった8月の13日、西之表港に寄港した三井オーシャンフジ（3万2477トン）の船上から緑濃い島を眺望しました。工事作業船も停泊する頭上に青空が広がります。亡き人の家族、故郷への思いをしのびながら、島の将来に思いをはせました。



クルーズ船から眺めた西之表市街